

定次郎略伝 —アウトローの後半生

浜田定次郎、明治三年、石川県河北郡の百姓平侯三四郎の三男として生まれ、後に次男吉次郎とともに北川という家に養子に出された。たびたびの飢饉にみまわれたこともあり、長じて百姓仕事に嫌気がさしてこれを離れ、出奔して諸国を放浪する。この間、定次郎はまだ存命だった幕末の俠客大前田英五郎に出会っている。この出会いは定次郎がその人生を決定する上で重大な契機となった。

「いままでいろんな人間に出会ったが、あれほどでっかい人物に会ったことはない」

定次郎は生前、身内の者によくそう語っていたという。このときどのような話を聞かされたのか判らないが、定次郎はこれ以来、自分も俠客になろうと決心した。この頃、次兄の吉次郎が弟の放浪をみかねて、彼が働いていた佐渡の金山へ呼びよせた。しかし数年を経ずして、この地で見初めた女と手に手を取りあって北海道へ逃げ、函館の渡世人の所へわらじを脱ぐ。北海道の玄関でもあり、最大の貿易港でもあった函館は、全道の農水産物の集積地として賑わっていた。出入りの和洋の運搬船はひきも切らず、波止場人足の手は慢性的に不足しており、ここで定次郎は沖仲仕、波止場人足の手配師として力量を積む。

この仕事で自信を深めた定次郎は、発見されてまもないが、急速に発展を続けていた夕張炭坑に目をつけていた。鉱山は佐渡でその様子を呑み込んでいる。そこなら仕事が出来そうだなと踏んだ定次郎は、さっそく夕張へ移って独立した。

まだ一部町村と海岸線しか開発の進んでいなかった北海道で、内陸に位置する夕張の炭坑地帯は開発もない新興の町で、かなりの無法もまかり通るような状態だったという。“いい稼ぎができる”という噂を聞きつけて集まった流れ者をまとめ、これを炭坑へ人足や坑夫として送り込む。流れ者を取りまとめるのさえなかなか一筋縄ではゆかない上、顧客である石炭会社の奪い合いで、やくざ同士の抗争が日常茶飯事だった。夜もピストルを枕元に置いて寝る緊張した毎日だったという。このときに用意したピストルや二十振もあった刀剣類は、錆びついてはいたが、太平洋戦争後まで残っていた。昼間は手配師として稼ぎ、夜は夜でこれとは別に賭場（とば）を開帳した。

その頃出会ったのが浜田フサだった。定次郎は一目見て彼女が気に入り、子供までいた佐渡以来の女と別れて、フサと一緒にになった。しかし稼業上のさまざまなトラブルが重なり、夕張にすることができなくなった。このため、当時日高地方の海産物や農産物の集積地として、名を知られていた浦河に足を踏み入れた。

「浦河町史」によれば定次郎は明治三十五年の来道となっているが、明治四十二年にはすでに遊廓を経営していたというから、三十年代の後半から四十年代にかけてはすでに浦河に来ていたものと思われる。ちょうどこの頃、浦河の浜ではトキサケによる未曾有の景気に沸いており、各地から博奕（ばくち）打ちが入り込んで賭場を開帳していた。（「鱒の豊漁博奕の貧乏」の項参照）。この賭場のひとつを定次郎が開いていた。場所は現在の浜町通り本間玩具店の隣である。ツボを振っていたのは板倉という男だった。ここで家運を傾けた浦河人も十指にあまるといふ。

当時、北海道の渡世人を取り仕切ったのが誰だったか知らないが、日高も町ごとには縄張りがすでに決められており、定次郎は浦河地区、荻伏から幌別までの一帯をその縄張りとしていた。荻伏、絵笛

、向別、浦河、西舎にそれぞれ賭場があって、浦河町内は別として、月一回程度その地域で定期的に開帳した。そのときは板倉をはじめ、一の子分といわれた“蒲勝”など数人を引きつれて出かけたという。

こういう商売の欠点は、ときどき警察の厄介になることで、定次郎も何度か検挙された。とはいえ、顧客を失望させるわけにはゆかず、このときにはフサが子分を連れて賭場に赴いた。しかしそれも度重なるとさすがにたいへんで、ここでフサの発案で、すでに明治三十年から営業していた常盤町の遊郭“中川楼”を買い取った。この店はのちに「梅花楼」と改名したが、この試みは成功で、かなり金をかけて手を入れはしたが、日高管内はおろか日胆随一の店として賑わった。

これにより安定した生活を確保した定次郎、フサは、四十二年、まだ佐渡の金山で働いていた兄夫婦を呼び寄せた。兄吉次郎はすでに肺を患っていて、これを療養させるつもりだった。梅花楼の奥の山際に、そのころ始めた競走馬の馬小屋があった。これに隣接させて小家を建てて兄夫婦を住ませたが、その兄も五年後に亡くなった。

大正の初年、三石町を仕切っていた南川という人物が、大通三丁目の家（現日高米穀の所）に逗留していた。数年前、三石町歌笛でイカサマ賭博をやったやくざ者を馬で追いかけ、静内川橋上で追いつきこれをその場で斬って自首した男だという。年（ねん）が明けて出所し、定次郎の所へ挨拶に来てそのまま八週間も逗留した。そういうこともあった。このときにはすでに定次郎も賭博からほとんど足を洗っていたらしい。しかし賭事は根っから好きだったらしく、梅花楼開設当時から馬を飼っていたのも、あちこちで開催されていた競馬会で持馬を走らせるのが楽しみだったからだという。また“浦河競馬”の馬券の販売も、彼の発案になるものだといわれている。

大正に入ってから定次郎は、“浦栄座”の開設にも携わり（町史）、三丁目の自宅で小間物店を開き、一方で回漕業にも手を出している。梅花楼の経営は全面的に妻フサに任せ、自身は本格的な馬づくりを始める。大正十年、日高畜産共進会で、生産馬アデレン号は一等をとり、これが農林省買い上げ馬となり、ますます馬づくりにのめり込んでゆく。それがまだ草創期にあった競走馬生産に、結果的に先導的な役割を果たしていった。もうかつての賭博打ちの面影はなく、すでに一人の事業家の風貌を備えた男がいるだけだった。

昭和五年、町議会議員に最高点で当選して以来、三期十二年間を精勤し、かたわら事業家としてさまざまな経済活動に関与しながら、昭和十八年八月、享年七十四歳でその生涯を閉じた。波乱万丈ともいえる振幅の大きな人生だったが、彼もまた北海道の歴史を作った人間の一人だった。

[文責 高田]

【話者】

手取 孝継 浦河町大通三丁目 大正十一年生まれ

【参考】

浦河港大観 昭和九年 浦河町漁業組合